

情報共有

(3枚非管理用) / 小野 大輔

NISA 班 ー プロシ共済チーム

東京電力株式会社

取締役 関野

プラント状況 (本店レク) 議事メモ

日時：平成 23 年 10 月 5 日 (水) 11:00~11:30

場所：東京電力本館 3 階大会議室

先方：記者約 15 名 (カメラ 3 台)

当方：原子力・立地本部

原子力設備管理部

広報部

配布資料：

- ・ 福島第一原子力発電所 プラント関連パラメータ (10 月 5 日 6:00 現在)

よりプラント状況、配付資料に関して説明。

質疑：

Q. 福島第一原子力発電所 2、3 号機の原子力安全・保安院への事故時運転操作手順書に係わる報告は昨日が期限であったが、提出を延長したのはなぜか。

A. 昨日が提出期限であったが、公開により安全上の支障等が生じることとなる情報の具体的範囲の特定等に時間を要しており、昨日、原子力安全・保安院に対して提出期限の延長をお願いした。なお、10 月 7 日までには準備を整えて提出する予定である。

Q. 1 号機は提出に間に合っているが、2、3 号機の提出が遅れた要因は何か。

A. 1 号機は 9 月 27 日の指示文書受領後、提出に向けた確認作業に約 1 週間要している。2、3 号機についても同程度の確認期間をいただいているものの、1 号機の確認作業とラップしており、十分な確認が出来ていないためである。したがって 3 日ほどの猶予をいただいた。

Q. 3 月 15 日 6:00 頃に 2 号機から発生した異音の関係について。10 月 2 日の会見の中で [ ] が 3 月 15 日 6:12 頃に地震計に波形が 1 つ捉えられたものの、誰がどこで聞いて、どう報告したのかは把握していないと発言したが、それについて詳細はわかったのか。

A. 現在、詳細を確認中である。免震重要棟内で異音を聞いた人間が誰で、どのように発話し、情報共有されたのかということに加えて、同時刻帯に 2 号機の圧力抑制室の圧力計がダウンスケールしたとの報告が現場から来ていたとのことだが、それぞれについてどのような状況下で確認されたかについては再度確認する。

Q. 誰が異音を聞いたのか。

A. 免震重要棟内で異音が発生したことについて確認されていたことは把握しているが、実際に異音を聞いたのが社員か作業員なのか、聞いた場所が免震重要棟内か現場なのかについては再度確認中である。

Q. 4 号機においても同じ時間帯に異音が発生したとの話があるが、異音は 2 回あった

ということなのか。

Q. 現在確認中である。現場にいた人間が4号機の建屋が爆発したことを見ているが、爆発の発生が1回か2回なのかについては確認できていない。

Q. 当時、圧力抑制室の圧力計の指示値が0になったということだが、本日配布されたプラントパラメータの指示値についてもダウンスケールの状況である。指示値としてダウンスケールを把握できるのか。

A. ダウンスケールは0を振り切り、下限から動かない状態のことを指している。

Q. 圧力計の目盛りは0までであるのか。

A. ある。

Q. 1号機の事故時運転操作手順書に係わる原子力安全・保安院への報告について、マスキングした部分は事象ベースが約3割、徴候ベースが約6割、シビアアクシデントが約9割か。

A. その通り。

Q. 先日、衆議院科学技術・イノベーション推進特別委員会に提出したときにマスキングした部分と、今回のマスキングした部分の違いはあるのか。

A. 衆議院科学技術・イノベーション推進特別委員会には事象ベースの一部とシビアアクシデントの表紙と目次を提出している。事象ベースのマスキングした部分については、当時議論となっていた非常用復水器の手動停止と格納容器スプレイ系の起動の部分についてだったため、当該部分以外はマスキングをした。今回は原子炉施設の安全確保上支障となる部分と知的財産に係る部分をマスキングしている。

Q. 手順書の開示について、どのような考え方でいるのか。

A. 事故時運転操作手順書は社内文書であり、原則非公開と考えている。今回は原子力安全・保安院での事故調査に必要であり、報告徴収を受けたため、例外的に対応をさせていただいた。今回、公開に関して支障が生じることとなる具体的な部分や、その根拠について準備をし、提出をさせていただいている。

Q. 政府の事故調査検証委員会から事故時運転操作手順書の提出を求められているのか。

A. 現時点で具体的な要請があるのかについては承知していないが、資料提出の要請があった場合にはしっかり対応させて頂く。

Q. その際にはマスキングはせず提出するのか。

A. どのような形で提出するかは先方と相談のうえ対応してまいる。

Q. 2、3号機の事故時運転操作手順書の提出に時間がかかっているとのことだが、1号の手順書と2、3号機の手順書でマスキングをする範囲の考え方に違いはあるのか。

A. マスキングをする範囲の考え方については1号機と2、3号機とで変わりはない。具体的にはシビアアクシデントのマスキングの範囲が、多少増える可能性があるのではないかと考えている。

Q. 徴候ベースについても、重要な設備や手順が増えるとマスキングの範囲が増えるとの事だが、徴候ベースについても増えると予想しているのか。

A. その通り。

Q. 2号機の注水量と圧力容器の温度の関係について、2号機は注水量を増やしたことで、圧力容器の温度が下がっているように思えるが、炉心スプレイ系の効果について、どう考えているか。

A. 2号機圧力容器の温度が下がっている原因については、注水量を増やしているためなのか、炉心スプレイ系からの注水が効いているためなのかについては判然としない。全体的には炉内への注水量を10m<sup>3</sup>/hから11m<sup>3</sup>/hに増やしたことと、炉心スプレイ系からの注水量を6m<sup>3</sup>/hから7m<sup>3</sup>/h増やしたことで、効率的に温度が下がっているのではないかと考えている。圧力容器下部の温度は、これまで6時間に0.5℃程度の割合で低下していたが、昨日23時には昨日6時と比べて3℃程度一気に低下している。いずれにしても注水量を増やしてから、1日程度しか経っていないことから、様子を見る必要があると考えている。現在注水量と温度の変化率を現在評価しており、原子炉の冷却を今後どのように進めるかは検討しているところ。

Q. 2号機炉内の燃料の状況を把握するために今後シミュレーション等を実施しないのか。

A. 2号機の燃料がどのような状態になっているのかについては、プラントパラメータ以外に、格納容器のガスの分析等を含めて評価する必要がある。

Q. 2号機と3号機の燃料集合体の数はほぼ同数であるにもかかわらず、3号機と比べ2号機の温度の下がり方が低いことから、燃料の状態をある程度推測することはできないのか。

A. 現時点では燃料の状態についてはっきり分かっていない。燃料が炉心支持盤にどの程度残っているかや、燃料の崩れ方の違いにより、温度の下がり方に影響が出ているのではないかと思うが、燃料の状態については不明である。

以上